
勇者のオマケ改め.....

ランプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者のオマケ改め……

【Zコード】

Z8403U

【作者名】

ランプ

【あらすじ】

はいどうも。勇者のオマケの木崎刹です。とりあえずトリップ特典とも言つべきチート能力はいただきましたが、勇者のオマケといいういらん微妙な立場までいたきました。勇者様である双子の弟はちゃんと勇者勇者しているみたいですが、さて私はどうしようか?

(前書き)

とうあえず思いついたネタをガーッと書いてみました。やはり短編はいいですね。

2011年8月6日誤字訂正 「譲ちゃん」を「嬢ちゃん」に書き換えました。

2011年8月7日一部訂正 神様の一人称を「僕」に統一しました。

誤字脱字の「」指摘ありがとうございました。

私が「」の世界で最初に見た物は空だった。

雲がほとんどない澄んだ水のような空を、私は目覚めてからしばらく、ボーッと眺めていた。

体はどこかの原っぱに横たわっているらしい。青々しい草の香りが鼻孔をよぎった。

風が体をフワリと撫ぜる心地よさに私は一度寝を決め込もうとした。まあ、結局強制的に起き起されたんですけどね。

遠くからドカドカとリズムを持った地響きがし、ゆっくりとそちらに向けると、そこにはお世辞にも優しそうとは言えない風貌の……ぶつちやけ盗賊としか思えない輩が馬に乗り向かってきていた。

さすがに危機感を持った私だが、時すでに遅し。連中は私の周りを囲つように陣を組むと一ヤニヤといやらしに笑みを浮かべてこちらを見下ろしてきた。

中途半端に起き上がっていた私はそいつらを睨みあげながら、相手の出方を窺っていた。

すると、連中のなか一際がたいのいいオッサンが進み出てきた。どうやらローリングが頭のようだ。

「よお嬢ちゃん」

馴れ馴れしい男だ。「」の相手を舐めきつた態度といい第一印象は最悪である。

「随分珍しい毛色だが、そりや地毛かい？」

男達は無遠慮に私を私の髪を凝視している。なんと失礼な奴らだろ？。

だが、よくよく見てみると、確かに連中の中には黒系の髪色をしている人間は一人もいない。それどころか東洋系の顔立ちですらない。どちらかと言つとヨーロッパ的な顔立ちだ。私が持つているヨーロピアンイメージとは違い、まったく品がないが。

「よく見りや田ん玉も真っ黒じゃねーか！ ハハッ！ こつやとんだ拾いもんだ」

嬉しそうに頭が叫ぶと、周りの男達も「オオー！」と盛り上がる。つい。

「嬢ちゃんいつたいやーの出身だ？ 名前は？」

どつかに売り飛ばすつもりのくせに名前を尋ねるのかこの男は。

「……出身は日本。名前は刹ヤツ」

「二ホン？」

聞いた事もない。と言つ表情である。周りの男達も皆一様に同じ表情だ。

私が正直に出身と名前を明かしたのはある予感があつたからだ。ここが異世界であるという予感。

そう考えたキッカケは何を隠そつての前の男達が騎乗している動物だった。

最初は馬かと思ったが、違う。私の中の知識では、馬には角など生えていなかった。

馬に角と言うと、あの二ローンを思い起しそうが、これとはまつ

たく別物だろ？。

何故なら、私が知るメルヘン生物ユニークーンには、こんな肉を食い千切るのに役立ちそうな牙など生えていないからである。

こんな「肉食ですよ」と主張するようなオーラをまとったユニークーンなど、乙女として断じて認めるわけにはいかない。

そこからここは、私が知る世界とは違う場所……異世界であると
いう考えに行き着いた。

だから私はわざわざ出身地を明かした。もし異世界であれば、今
の男達のような反応がかえつてくると思ったから。

そして予感は予想へと……

「……アメリカは知っていますか？」

日本だけなら知らない人もこの地球上には存在するだろ？。だが、
アメリカを知らない人間というのは余程の辺境でなければまずいな
いはずだ。見る限り、この男達の生活水準はそこまで低いようには
見えない。

サバンナやアマゾンに住んでいる類の方々ではないのは明白だ。

「アメリカ？」

予想が確信へと変わった。

「…………」は何という国ですか？

最後の足掻きをしてみる。無駄と笑うなれ。これでも一応混乱
の境地に達し、今すぐにでも泣き叫びたいくらいなのだ。

「はあ？ 嫁ちゃん頭大丈夫か？」

「いいから答えろ」

多少口が悪くなってしまったがそれも仕方がないだろう。男達は私の口調に色めき立つたが頭は大して気にした風でもなかつた。

「『』はグランフル国 のド田舎 地名で言つならフォルンだ

最後の足掻きが……終わつた。

* * * * * * * * セツ視点 * * * * * * * *

私の名前木崎は木崎剣せつ18歳。

剣道が趣味の普通の女子高生だ。……普通だつてば。

私には一卵性の双子の弟がいる。数秒しか差はないが、姉は姉だ。

弟の名前木崎は木崎烈れつ

私達はあの日、一人で剣道場で稽古をしていた。私も烈も剣道が趣味ではあるけれど、物凄く強いと言つわけではない。大会で二位か三位にやつと入れるくらいだ。しかも小さな大会で。

いい汗をかき、私服に着替え終わつた時、それはイキナリ來た。

召喚である。

いや、正しくは、多分召喚だつたのだと思う。

私には、足元に急に現れた魔法陣しか見えなかつたが、烈には何やら誰かの声が聞こえていたようだ。

『え！？ 世界を救う！？ 僕が！？』

察しのいい人ならもうここで分かるだらう。

そう。

私は勇者である烈のオマケで異世界に召喚されたのである。迷惑甚だしい話だ。光の渦に飲み込まれる瞬間、私はおそらく烈が話していた相手と思わしき声を聞いた。

『なんかもう……』「めん』

おい！… 何が『めんだ… そんな言葉で済ませれるような問題じゃないだろコレ！

と言づか、勇者である烈と引き離されて別々の場所に召喚されるつて何なんだ。嫌がらせか。嫌がらせなのか。

そう悪態を心の中でつきながらも、私は最後に聞いた言葉を思い返した。

『とりあえずは能力を授けとくから頑張って… ホント』「めん』

能力はいいが、何回謝る気なんだコイツは。いや何回謝られても許したりしないが。などとその時は思ったものだ。

そして現在。

私は盗賊の死屍累々の中に立っています。いや殺してませんけどね。

* * * * * * * * セツ視点 * * * * * * * *

「グ……ツ！ 何者だテメエ…」

唯一意識のある頭が私を睨みつけながら吐くよつて言った。女性に対して態度のなつてない奴だ。

「私？ 私は…」

私はこの世界でどんな存在なんだろう。

ふと、そう思った。勇者は烈の役割だ。離されて召喚された事を鑑みるに勇者補佐などの役目を持つていても同じだろう。ならば、私はいつたい何なのか。

この授けられた力も、おそらくはオマケで召喚してしまった事に対する対価……と言うか謝罪の気持ちなのだろう。あの声が幾度も「ごめん」を繰り返していた事からそれがわかる。

世界に求められたわけでもないのにこの世界に来てしまった異物

……それが私だ。

だがそれだとあまりにも私が不憫なので、自分自身の役割を勝手に決めた。

「私は……【勇者の血縁者】だよ」

「…………はあ？」

完全に虎の威を借りる狐状態だが、それも仕方ないだろう。この世界に必要とされているのは勇者である烈のみだ。私はオマケとして着てしまつたのだから、オマケとして存在するしかない。切ない気持ちが湧き上がつたが、それはあえて無視した。

* * * * * * * * セツ視点 * * * * * * * *

その後私は勇者である烈を探し、共に魔王を倒しに……行かなかつた。

烈が見つかからなかつたわけではない。むしろ、國中が勇者降臨に沸き上がりお祭り騒ぎだつた。

だが私はここで考えた。烈にもあの声の主からチート能力は貰っているはずだ。それならば私など必要ないのではないか？

そもそも私はオマケなわけで、いてもいなくとも大丈夫だという存在のはずだ。

ならばこにはオマケにされてしまった私のほんの少しの意趣返しとして傍観者に徹するのも悪くないのではないか？

と言つわけで、私は髪色や性別などを隠し、冒険者として生きていくことにした。

ありがたい事に、声から貰つた能力はまさにチートと言つて差し支えない程のもので、まさに敵無しだった。

そうやつて生活しながらも、勇者の情報は逐一手に入れた。当たり前だ。いくらチート能力を持つているとしても弟を心配しない姉などいないだろ？ まあその心配もただの杞憂でしたけどね。

勇者はメキメキ頭角を現し、遂には魔族との和平を果たした。

魔王討伐に行つたはずなのに何故和平となつたのかは、政治に疎い私にはまったくもつてわからなかつたが、まあ大した怪我もなかつたようなので良しとしよう。

そして、勇者としての役目を終えた事を知つた私は、魔族領から帰つてくる途中の烈に会いに行つた。

* * * * * * * * セツ視点 * * * * * * * *

「勇者様に会いたい？ 駄目に決まつてゐるだろ？」

勇者が宿泊している領主の門番には文字通り門前払いされた。勇者としての役目を果たした勇者に会おうと面会を申し込む人間が後を断たないらしい。

私もそのミーハー共と同類だと思われたようだ。門番の態度がひどく冷たい。

勇者にはこの国一番の魔道師（魔道師団団長）との国一番の剣士（国軍將軍）がついているはずだ。そいつらとも今後のパイプを持とうと勇者経由で接触を果たそうとする貴族連中がいるらしい。

ハツキリ言つて迷惑この上ない。私はただこの世界での唯一の肉親に会いたいだけなのに。

仕方がない。王都までの道中で押し掛けるしかないようだ。勿論相応のリスクはある。襲撃者だと思われてうっかり殺されたりしたらまたたものではない。まあチート能力があるからそう簡単には殺されないだろうけど。

今私の目の前には勇者達一行を乗せた馬車がゆっくりと優雅に王都への道を進んでいた。

煌びやかな細工の馬車が陽に照らされ輝いている。まるで勇者の栄光を讃えているかのようだ。

……少し卑屈な気持ちになるのはやはり私がオマケだからだろうか。

ほんの少し、陰鬱な気分になつていたら、視界の端にある一団が見えた。

各々が手に剣を持ち、その田には押さえきれない殺氣がこもつている。

その視線は真っ直ぐに勇者が乗る馬車へと向けられていた。

……いや確かに襲撃者に間違えられたら困るとか思つたけどさあ……本当に勇者を殺そつとする人間なんているんだなあ……

あれかな？ 役目を終えたチート能力を持つ人間なんて生きているだけ邪魔つて事かな？

それとも魔王を討伐せず和平なんにしてきた勇者に納得がいかないとか？

人間つていうのは本当に面倒で自分勝手だなあ。いや私も人間だけどさ。

一団は、一瞬息をつめると、次の瞬間馬車に向かつて雄叫びを上げなら突進していった。

馬鹿だ。

なんで叫ぶ。なんで奇襲なのに叫んで自分達の存在をアピールしちゃう。

あれが。最後の華として華々しく散ろうって言う魂胆か？

馬車からは別段焦つたような気配はない。まああれだけ派手に殺氣を飛ばしてれば余程の鈍感野郎かド素人じやなれば氣づくだろう。

次の瞬間、馬車の扉が勢いよく開いた。

中から飛び出してきた男は流れるような動作で剣を抜き放つと、そのまま襲撃者の首を切り飛ばした。

お子様には決して見せられないグロ注意な戦闘が繰り広げられます。勿論R指定です。心臓が弱い方は今すぐ気絶しましょう。

私は冒険者という職業柄、このような荒事もし�ょっちゅうあつた。もう慣れた。乙女として色々な物を失った気がするが人生とは諦めの連続であるとどつかの誰かが言っていた気がするので、その言葉にすがろうと思つ。仕方ないんだと。

そんな馬鹿みたいな事を考えている間に、襲撃者の惨殺劇は終わりを迎えたようだ。

周囲は血の色と匂いに満ち、さすがの私も顔をしかめる。

その中心にいるのは、この世界を生み出した男。まさに鬼神の如き太刀筋と動きだつた。

男は深い藍色の髪をしており、それは今は懐かしい日本人を思い起させた。

そんなよくわからない感慨にふけつていると、男がこちらに視線をよこした。瞳はアイスブルーだ。まるで凍るような視線である。思わず「こいつ見んな」と言いたくなつた。

「……ここにいるのはわかっている。何者だ貴様」

あつちやー。バレてる。

まあ国一番の剣士だと言つ話しだし、今の戦闘を見てもかなりの腕前であるのは間違えようがない。私の気配に気づいたのもまあ奴ならあり得るだろう。

「貴様とは」「挨拶だな。ただの通りすがりの冒険者だよ」

元來の負けん気がこゝで頭をひょいと出す。

「ただの通りすがりの? よく言つたな。気配を消しておいて」

その気配に気づいたお前はこつたいなんなんだと。

「クロウ? どうしたの? 誰と話してる?」

その声を聞いた瞬間、私は不覚にも涙が出そうになつた。
本当はすぐ会いたかった。だけど会えなかつた。オマケなんて
いう曖昧な立場の私とは違つて勇者という確固たる必要とされる立
場であるアーツとは、顔を合わせるのが本当は怖かつた。

激情のまま当たり散らしてしまいそうで会いに行けなかつた。

だけど、それらは本当は杞憂であつた事が今ならわかる。だつて
アーツの 烈の声を聞いただけでこんなにも嬉しいといつ感情が
溢れ出でくるんだから。

「今誰なのかを聞いたらいいだ。レツは馬車の中にいる。もしかし
たら伏兵がいるかもしれん」

「……烈」

普段の、意識して低めに出す声とは違つた、本来の地声で話す。
すると、馬車の中にいた烈が転げ出るよつて飛び出してきた。

「その丶……刹!?」

覚えていてくれた。たった一人の、私の半身。烈は一年前より少し背が伸びているようだつた。髪の毛は後ろに一つに縛り、腰には薄く輝く聖剣があつた。

一年前とは違う姿。だけど刹を見つめるその瞳はまったく変わらなくて……

「やつと……会えたね、烈」

私はやつと、体のほとんどを覆つていたマントを脱ぎ捨てた。

* * * * * 将軍視点 クロウ * * * * *

その【黒】に、俺は見た瞬間囚われた。

俺の名前はクロウ・キサキ。おそらく名前で察する事が出来るだろうが、初代勇者の家系だ。

勇者は異世界のキサキ家の者が毎回召喚される。召喚された勇者は必ずと言つていよいよ同じ世界の者と恋に落ち、この世界で生涯を終える。

勇者として召喚されて帰つた者がいないためか、召喚された勇者は皆一様に混乱する。こちらではキサキとは勇者の一族である事は子供でも知つている事だが、異世界にいる勇者の一族達は知らないのだ。

俺はそんな勇者の血が特に色濃く出た。勇者の色とも言える黒に近い藍色の髪色。周りの連中はそれを美しいと褒め称えたが、俺にはまったくなんの感慨も浮かばなかつた。

こんな暗い色のどこが美しいんだ。正直つうじことしか思えない。

貴色と呼ばれる【黒】に限りなく近い藍。

勇者の血が色濃く出たせいが、俺は優秀な人間として周りからは

見なされていた。

どんなに努力をしたところで、結局すべては【勇者の血】のおかげになつてしまつ。

それがどれだけ屈辱的だつたか。

盲目的に俺の髪色を敬う連中に、俺は心底呆れた。両親でさえも、俺を見ず俺の髪を見つめていた。

俺の事を見る人間など、どこにもいなかつた。

俺は周りを見るのをやめた。周りを見ても不愉快になるだけだと学んだ俺はただひたすらに剣の道にのめり込んだ。どんなに武勲を立てても結局は【勇者の血】のおかげになるから栄誉や栄光など目もくれなかつた。

そうしてゐる間に、いつの間にか気づいた時には国一番の剣士と呼ばれ、将軍という役職についていた。

そんな俺が五代目の勇者に会つた時に持つた感想は『平凡な男』だつた。

確かに勇者の証である黒い髪に黒い瞳をしてゐる。周りを囲う全員がそれを美しいと褒め称える。

昔の俺と同じ光景だつた。

それを冷めた目で見ながら俺は、勇者についていく魔王討伐の旅に想いをはせていた。

俺にとつては戦いが全てだ。それ以外は田にするのも鬱陶しい。

* * * * * 将軍視点 * * * * *

旅の結果を一言で言い表すなら、『肩透かし』だつた。

確かに幾度か魔族と戦いもしたが、当の魔王とは戦つどじろか会う事すらなかつた。

そもそもこの世界に魔王は存在していなかつた。

勇者を召喚するのはこの世界の神だ。だから勇者が召喚されたといふ事は魔王が存在するという事なのだと、俺達人間側は勝手に思

い込んでいた。

だが魔族の領域に行き、力ある魔族達（現在の魔族をまとめている）と和平を結ぶに至った。元々魔族との関係が悪化していたわけでもない。ただ神が勇者を召喚したから魔王討伐という流れになつただけの話だつたのだ。

だが今回の勇者召喚がまったくの無駄だつたといつわけではない。これで魔族とは表面上だけでも和平を結び、今後は少しづつでも交流を持つ事がすでに決定されている。

今回の勇者の役目が今までの魔王討伐とは違い、真の平和をもたらすものだつたと人間も魔族も受け止めている。

だが俺は不満だつた。魔族との和平にではない。俺は今回の旅で思つ存分戦う事ができると期待していただけに、この展開にひどく落胆したのだ。

欲求不満ともいうべき状態だつた王都へ帰還する馬車の中で、俺は外から向けられる殺気に気づいた。

心が躍つた。

相手が誰で何が目的かなどと一瞬も考えなかつた。

ただ欲するがままに、体が求めるがままに馬車の外へと躍り出た。首を刎ねる。腹を切り裂く。一撃の下敵を屠る。それは最早快感とも言うべき感覚だつた。

すべての敵を倒し終え、快感の余韻に浸つていると、チラリと気配に気づいた。

殺戮に酔いしれていたとしても、今までまったく気がつかなかつた。相当の手練だ。

その事に俺は喜ばしい気持ちを覚えた。まだまだ戦い足りない。もっと多くの敵を。もっと強い相手を。体が、心が求めている。

「……そこにはいるのはわかっている。何者だ貴様」

これで出てこなければ、問答無用で斬りかかるのみ。それもそれ

で楽しもうではあるが。

「貴様とははじ挨拶だな。ただの通りすがりの冒険者だよ」

その言葉に、知らず口の端が上がる。

「ただの通りすがりの？ よく言つたな。気配を消しておいて」

本当にただの通りすがりや野次馬としても、そんな事は俺には関係ない。相手が強い事は間違いないのだから、相手が嫌がつても戦うだけだ。

俺は鞄におさめていた剣に手を触れた。

「 クロウ？ ビーしたの？ 誰と話してる？」

その時、馬車の中から勇者が話しかけてきた。相手にとっては絶妙なタイミングだろう。俺にとっては最低のタイミングと言えるが。「今誰なのかを聞いてるといだ。レッは馬車の中にいひ。もしかしたら伏兵がいるかもしれん」

聞きよつこよつては勇者の身を案じる言葉と聞こえるだろう。だがその実、俺の獲物を横取りするなどといひ警笛の言葉ではあるのだが。

「……烈」

その時、目の前の自称通りすがりが、妙に高めの声で勇者の名を呟いた。

それはさつきまでの声とは違い、ビートか澄んだ空氣を思わせる雰

囮気を持っていた。ほんの少し、俺の中に田の前の人物への興味が生まれた。

今まで戦えるか戦えないかの一択しか存在しなかつた俺にはありえない事である。

その声に触発されたように、勇者が馬車の中から転げ出でくる。その顔にあるのは驚きと喜色と……ほんの少しの恐怖。まるで、期待しているものでなかつたらどうしようとも言いたげな表情である。

「その声……刹！？」

「やつと……会えたね、烈」

通りすがりは嬉しそうに言いつと、纏っていたマントを一気に脱ぎ捨てた。

その下から現れたのは

【黒】だった。

その【黒】に、俺は見た瞬間囚われた。

勇者と同じ黒。だが俺には、まったく別物に見えた。

勇者の黒を褒め称えていた連中の言葉が蘇る。

その美辞麗句を俺は今まで鼻で笑つていたが、今この時、あいつらの気持ちが分かつた気がした。

田の前の人物が、まさにその美辞麗句をそつくりそのまま当てはめたくなるほど美しかったからだ。

いや、あんな言葉だけではとても足りない。田の前の存在を言い表すにはどうしても言葉が足りなかつた。

艶やかな黒髪。滑らかな肌。緩く弧を描く唇。そして何より、強

い意思を持ちなおかつ喜びに潤んでいる漆黒の瞳。

そして俺は気がついた。俺は勇者と同じ色である黒に囚われたのではなく……

彼女の存在そのものに囚われたのだと。

* * * * * * * * セツ視点 * * * * * * * *

マントを脱ぎ去ると、烈は瞳に涙を滲ませ、私に抱きついてきた。じらえ切れなかつたひやつくりのような泣き声が、耳元で聞こえる。

「あ……会いたかったつ！　会いたかったよ刹ツ！」

「私も……会いたかったよ」

そつと抱き返してやると、いよいよ烈の泣き声は大きくなりもはや泣き叫んでいる表現してもいいくらいになつた。

その泣き声に急かされるように、馬車の中からメガネをかけた神経質そうな男が降りてきた。

「レツ？　どうしたのです？　……どちらの方は？　黒い……髪？」

胡散臭げに私を見た視線が、黒い髪に止まると瞳が大きく見開かれた。

「……こんちやーす」

とりあえず挨拶をしてみたが、抱きしめられているためちゃんと発音できず微妙な言葉になってしまった。

「あなたは何者です？ 黒い髪……それに顔立ちがレツに似ている
よつに見えますが」

質問攻めしたい気持ちもわかるが、まずはこの抱きつき虫をギリ
にかしてほしい。わざわざから殺戮剣士がこいつを見つけて居心
地悪いし。

あれか。勇者に馴れ馴れしく触るこのメス豚が！みたいな感じ
か。よく見る。触つてきてしまのは勇者だ。私じゃない。

そう考えていると、おもむろに殺戮剣士が動き出した。こりひり
向かつて大股で近づいてきたと思つたらベリッとトープのように剥
がされる。

あー……やっぱリメス豚がコースですかそっですか……

しかし予想に反して殺戮剣士は守るべき勇者をその辺にポイッと
放ると、腕に抱え込んでいた私に視線を向けてきた。なんだかひつ。
その視線が妙に熱く感じる。

「…………勇者放つていいのかよ」

「かまわん」

いや、かまうだろ。勇者だぞ勇者。役目を終えたと云つてもどう
あえずは勇者なんだからもう少し丁重に扱えよ。

「勇者などより……今はお前だ」

え。ナーフコレ。何が起つてるんです？

私の腰に腕を回し固定する殺戮剣士……というか、そろそろ殺戮
剣士って言つのも面倒くさいな。なんか嫌な空気になりつつあるし
こじは話題転換も兼ねて……

「さつきの質問に答えてやるよ。私はそりそりとぽかれてる勇者の双子の姉の木崎刹だ。で？　あなたは？」

私が名乗ると、メガネの男は驚愕し、田の前の剣士は嬉しそうに顔をほころばせた。

お前わつきと随分印象違うけどなんなん？　こっちが素なの？

「セツ……か

剣士はまるで愛おしいものの名前のように私の名を口にする。甘い。激甘い。なんだその声は。砂糖を口いっぱいに含んでもこんな甘い声は出ないぞ普通。

「俺の名はクロウ・キサキ。この国の国軍将軍だ」

「え？　キサキ？」

驚きのあまり素つ頓狂な声をあげてしまった。奴の名前が私と同じ『キサキ』である事に吃驚したのだ。

「その事については後で説明するよー刹

放り出されて転がっていた烈が、私に寄り添いながら言った。
が、次の瞬間には、またクロウの手によつて遠くに放り出されていた。

「ちよー？」

「近い。これに寄るな

抗議の声をあげようとしたが、わざとまでの甘い声はビリへやら、ひどく冷たい声でクロウは烈に吐き捨てるように言った。おい、態度がおかしくないか？」「これ普通逆だろ。

「ちょっとまでお前！あれ一応勇者だろ！？勇者を投げ飛ばしていいのかよ！？」

「だからかまわんと言つてこるだらう」

「いやかまうよー。むしろ何で私を投げ飛ばさないー？普通怪しい私の方を拘束するでも投げ飛ばすでもするだらうー？」

「お前を投げ飛ばしたりなどするものか。もしそんな事をする輩がいたら……」

クロウの瞳がスッと細められる。周囲の温度が一気に冷え込み背中を冷たい汗が伝い落ちる。

「……潰す」

おい烈。おい勇者様。目の前に魔王がいるぞ。今すぐ討伐しろ。お願いだから討伐してください。

「……無理です」

私の視線の意味を正確に読み取ったのか、烈はさつきまでとは違う涙を目に浮かべプルプルと震えながら言つた。

使えん！なにこの勇者使えない！

勇者のオマケだからハツキリ言つが、お前今勇者の威厳の欠片もないぞ！言つうなればチワワ！チワワのような存在！

もういい！　このチワワみたいな勇者を連れてこの魔王から逃亡してやる！

私はこの時知る由もなかつた。

まさかこの後、この魔王から求婚という名の脅しを頂き、無敵と思つていたチート能力をなんなく破られ、絶対に行きたくないと思っていた王城に無理やり連行される事にならうとは。まったく、全然、欠片も思いもしなかつた。

* * * * * * * * 神様視点 * * * * * * * *

あ、どもども、こんにちは。神様です。

今回も異世界の木崎家の双子さんを召喚させていただきました神様です。

いやあ、やっぱ木崎さん家はいいね！　勇者にピッタシ！　僕が与えた能力がちゃんと使えるからね！　普通の異世界人だと妙な雑念つて言うかノイズが入つてちゃんとシンクロしないから、木崎さん家みたいに何も考えてないお馬鹿……いやいや、純粋な人達つてすごい助かる！

今までは一人ずつ召喚させてもらつてたんだけど、今回は事情が事情なだけに一人いつぺんに来てもらつちゃいました。

今回はねえ、長く続いた魔族との戦いを終結させるつていう役割の勇者と、あと魔王そのものを鎮める勇者を呼んでみました！

戦いを終結させる勇者つていうのは言わずもがな烈君ですね！

あのヘタレ……いやいや、優しさがまさにベストマッチ！　な役割だつたんじやないかと自画自賛します！

そして次に……これが最も重要な案件だつた訳ですが……魔王を鎮める役目……まあぶつちやけ生贅ですね。それが刹ちゃんです。

で、件の魔王ですが、この世界の人達は皆魔王はないって思つてるみたいだつたけど本当はいるんですよ？　それが何を隠そあ

のクロウさんです。

皆魔王は魔族の中から生まれるとばかり思つてゐるようですが、元々魔族だつて人間から派生した亞種なわけで、人間から魔王が生まれる可能性だつて十分あるんですよ？

そもそも魔王つて言つるのは絶望に身を焼かれ憎悪に心を焦がした存在です。誰にも顧みられる事なく、戦いにのみ安らぎを得ていたクロウさんは遅かれ早かれ、いずれ魔王になつてゐた事でしょう。まあ本人は自覚なかつたようですが。

それに、実際に魔王になつたとしても、元々人間だつたという事で、また違う名前がつけられていたかもしれませんね。こう、世纪の虐殺者とか。

で、そうなつたらそくなつたで、また勇者を呼んで倒してもらえばいいかなあとかも思つたんですけど……一応勇者の家系の人間だし、彼があなつたのはちょっとだけ神である僕のせいかなあとかも思つた訳ですよ。

だからまあ、神の温情みたいな物で、今回も異世界の木崎家の方に犠牲になつていただきました。

別にクロウさんが怖かつた訳ではありません。このまま行くと神である僕を殺しにきそうな勢いだつたとか全く関係ありません。自分の身の安全のために生贊として刹ちゃんを魔王に捧げたわけでは決してありません。

それで良心が咎めて、最初の一年くらいは自由を味あわせてあげようと召喚場所をズラしたなんて事実は一切ありません。ありませんつたらありません。

……………「ごめんね刹ちゃん。

【勇者のオマケ改め……魔王の生贊】完

(後書き)

タイトル変わっちゃいましたね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8403u/>

勇者のオマケ改め……

2011年10月9日04時47分発行